



Agora

アゴラ

第39号

鶴見大学図書館報



館長就任にあたり

文学部教授 丸 山 昭二郎

このたび、鶴見大学のお仲間に加えて頂くと同時に、図らずも図書館長をも併任することとなり、新参者としては大変とまどっています。

本学の図書館は、歴代館長および館員諸氏の御努力で、新館も完成し、コンピュータ化もめどがついた状況とのことで、下手なたとえをすればジェット機が離陸して水平飛行に移ったような状況にあるのではないかと思います。

しかし、今後の情報社会の進展は、教育の場や図書館に大きな変革をもたらすものと予測できます。これからは、未知の空域にはいるわけで、時に乱気流が予想されるので、シートベルトを締めてということになりましょう。

幸いなことに、ベテランのコー・パイロットとよりぬきのクルーがいるので、新参者の館長も何とか操縦可能かとも思いますが、なにせ飛行経験皆無ということなので、よろしく全学的に御支援を頂くをお願い申し上げます。

私は国立国会図書館以前に南山大学図書館に2年間奉職していたことがあります。今から35年も前のことで、大学図書館も大きく変化していることと思います。利用者である学生・教員のニーズに活発に反応し、元気のよい図書館を、今後館員諸氏と手を携えて運営していけることを切望いたしております。

(まるやま しょうじろう)

目 次

館長就任にあたり 丸山昭二郎	1
文学研究と図書館活用法 相良英明	2
蒐書日誌(八) 大屋幸世	4
装幀をめぐる断章 大屋幸世	5
新刊あらかると	12
図書館だより	14



文学研究と図書館活用法



文学部教授 相良 英明

僕の研究分野では、書く論文のテーマ、あるいは研究内容によって、図書館利用の仕方がそれぞれ異なっている。

例えば、一番オーソドックスな作家研究あるいは作品研究の場合、図書館は余り使わない。なぜならば、例えばジョウゼフ・コンラッドに関して言えば、内外で発行された、あるいは発行されているコンラッド関連文献は、ほとんど全て自分で持っているからである。もっとも、そのために歴大な金を使ったけれど。というのは、僕の研究分野のコンラッドだとかロレンスだとかオーウェルなどは、作品も多く、全集になっており、研究書も数多く出版されている。そのため、一人の作家に取り組むと、最低でも2、3年はかかってしまう。原書で全集を読破するだけでも、1年や2年はかかってしまうのだから。となると、図書館の貸出し期限には、とても返却できないし、おまけに書き込みもしたい。というわけで、プロの研究者といたしましては、自分で買うことになってしまう。もっとも、特に専門にするつもりはないが必要上研究をしている作家の場合は、大いに大学図書館を利用していることは、言うまでもない。

それに対して、例えば「産業構造の変化と家族の変容——D.H.ロレンスの場合」といったテーマ研究、あるいは「日本におけるG.オーウェル受容の諸相」といった比較文学的研究のときは、大いに図書館を利用する。図書館なくしては、研究できないと言っても差し支えない。もっとも、テーマが違えば、図書館の利用の仕方も違う。「産業構造の変化と家族の変容」は、大学図書館ばかりではなく、一般公共図書館が中心となる。それに対して「受容の諸相」では、大学図書館と国会

図書館の利用が中心となる。そこで、この二つのケースの図書館活用法を、体験に即して書こうと思う。

1. 「産業構造の変化と家族の変容——D.H.ロレンスの場合」のケース

このケースでは、三種類の本が必要になる。第一にロレンス関連、第二にイギリスの産業構造の変化に関するもの、第三が近代における家族についての論考である。しかし、実際に資料として捜したのは、この順序ではない。

まず第一に、D.H.ロレンスはもう長年研究してきて、資料は相当量持っている。そして、ロレンスについて、色々考えたり論じたりしているうちに、ロレンスにおける家族の問題について論じてみようと思いはじめた。「家族」というテーマは、ロレンスに限らず、20世紀文学の大きな文学テーマの一つであり、特に、今日の状況の中では、社会的に緊急性を帯びた問題となっている。

そこで、鶴見大学図書館や一般公共図書館の「家族論」や「社会学」「家族心理学」「文化人類学」「女性論」等々のコーナーの、「家族」に関する本を手当たり次第に借りてきて読み、家族論の現在、現代家族の問題点についてのコンセプトを頭に叩きこみ、自分なりの現代家族論を形成した。また、図書館のパソコンで「家族」「家族論」で検索して貰って、捜した本もある。更には、現代文学で国境を問わず、家族の問題が中心テーマになっている本を読みあさった。この段階でわかってきたことは、原始社会から現代社会に至るまで、産業構造の変化によって、家族を取り巻く環境が大きく変わり、その結果家族の役割と問題が時代によって変化してきたということであった。

この段階で、題目に「産業構造の変化と」

という頭を、「家族の変容」の前につけることにする。すると今度は、イギリス近代社会の産業構造がどのように変化し、それに連動して人口や子供数、世帯構成人数などがどう変化したかを調べる必要がでてきて、それを調べるために、また図書館通いをするようになった。更にこの段階で、ロレンスに関して類似した研究が過去になされていないかどうかを、『英米文学研究文献目録』や『英国小説研究書誌』などのロレンスの項目で調べる。そして、近そうなテーマがあれば、その論文の載っている紀要や雑誌をコピーして目を通した。もし、同じことを論じているとすれば、こちらとしてはわざわざ研究する価値がないわけで、それをチェックするためである。また近い研究であっても、論点や結論が違っていれば、参考にできるものは注をつけて参考にし、批判すべきは批判し、無視すべきは無視する。研究というものは、過去の研究の上にプラスすることによって、進歩することができるのだから。まちがっても、データや論旨を盗むためではない。

こうして、やっと書くだけという段階に辿りつくが、ここで図書館から離れられるわけではない。実際に書き始めると、手許の資料だけでは足りないことがでてきて、たった一つの言葉を書くために、図書館に足を運ぶこともあるのだ。

2. 「日本におけるオーウェル受容の諸相」のケース

このケースでは、ほとんど図書館詣でと言って良い程、図書館通いをした。そもそもの興味の発端は、オーウェルの『1984年』の年に、実に様々なオーウェル論が書かれたことに始まる。政治的には右翼から左翼に至るまで、職業的にも文学者は言うに及ばず、経済学者、政治学者、哲学者から建築家、詩人に至るまで、広範な人々によって、様々な論点から論評されたことに注目し、オーウェル論の諸相としてまとめたことが、きっかけとなった。

このときは、1983年と1984年に出版されたオーウェル論の本や特集雑誌を手当たり次第かき

集めたばかりではなく、図書館で、参照できるありとあらゆる雑誌のオーウェル関係記事をコピーした。このときばかりは、全く油断ができなかった。研究雑誌や、四大新聞の社説や文芸欄、総合雑誌から文芸誌、経済誌、業界誌、詩誌、といった硬派の雑誌ばかりではなく、SF雑誌、女性週刊誌、ヤング向け男性雑誌、政党機関誌、経済新聞、地方新聞、等々を、大学図書館や国会図書館にこもって捜しつづけた。

そして、これをもとに、「日本におけるオーウェル受容」の研究に足を踏み入れてしまったのである。このとき主に利用したのは、勿論鶴見大学図書館と国会図書館であるが、それ以外にも日比谷図書館をはじめとする公共図書館や、学部数の多い他大学の図書館にも通った。中でも国会図書館は毎日通いつめた。いかめしい国会図書館の雑誌閲覧室で『プレイボーイ』のバックナンバーを山積みにして調べている光景は、我ながら違和感があったが、隣の人は何と『りぼん』を山積みをしていた。(ちなみに、『少年マガジン』で、1970年に石森章太郎が『アニマル・ファーム』を漫画にしている。)

そして、この成果を発表後、現在は集めた資料をもとに、『日本におけるオーウェル書誌』という本を出すべく、執筆の最中である。

以上、二つのケースを述べてきたが、どちらも一つのテーマが、図書館を利用して研究をすすめるうちに、テーマが自己増殖を始め、研究に深化と拡がりをもたらすものとなっている。特に「拡がり」が出てくることが、研究における図書館利用の最大の効用だろう。文学研究は書斎の中だけでもできるが、深化させることはできても、ややもすると拡がりには欠ける。その点、図書館を利用して研究しているときの楽しみは、拡がりによって研究に幅がでてくことであり、更に言えば、本を捜しているときに、その本の隣や近くに、直接研究とは関係ないけれど、面白そうな本を次から次へと発見できる喜びである。

(さがら ひであき)

菟書日誌（八）

文学部教授 大屋 幸世

某月某日

神田朝日書林の雑誌の山の中から、「国語文化」第二巻第一号（昭17・1）を抜き出し、値を訊いて購う。千円。「特集 日記文学」で、目次を見ると、ほとんどは古典についてのもの。保田与重郎の「後鳥羽院以後隠遁詩人論」などには関心が向く。どういうわけか「讀岐典侍日記」論が二本ある。玉井幸助と佐山済のものだ。しかしそれ以上に私の目を射たのは、船越章の「鷗外日記襟考」である。鷗外日記については何度か触れて来た私ではあるが、こういう論があるのは知らなかった。帰りの東西線の車中で読んでみる。おもしろい。明治三一年日記を対象としたものだが、日記を盲信することを避けつつも、鷗外日記に「社会的事象を記述することに比較的乏しかったことをひとつの特長として数へる」あたり、鷗外日記の射程の短さを早くも衝いている。「日記は作品ではない。しかし日記も亦作品に近い性質を持つ場合もあるであらう。」とする見解には、私も賛成である。船越章は甲府放送局員とのことだ。鷗外研究者としては私には未知の人だ。帰宅して、網羅的な参考文献目録を掲載する、『近代文学研究叢書』（昭和女子大学）20の森鷗外のところを見るが、この論は逸せられている。ほかの鷗外文献目録を見てもない。惜しい感がする。

この雑誌、日記抄として、何人かの日記を掲載している。高橋新吉、飯田蛇笏、前田夕暮、宮本百合子、太宰治、壺井栄、伊藤永之介らのものだ。それぞれ面白い。たとえば高橋新吉のはこうだ。

十一月七日

蛙の皮を剥いて溝の流れ
の中で四肢を引き裂き、
うつむいて無心に千断り棄
ててゐる女の子があつた。

日記というより詩に近いが、いかにも新吉的世界だ。

太宰治のものも引用して置こう。

私は日記を付けてゐませんので、家の者の日記帳から拾つて左記いたします。

十一月二十一日 雨

主人暗き中に起きて皆様を見送りに東京駅に出掛けらる十一時頃お帰り。午後、鰯崎、池田、賀川、戸台の諸氏順々に来訪。夕方、主人外出せらる。

雨中銭湯に行き買物し、道悪く転びて難渋

せり。町税一円、銀行に収む。

この文、日外アソシエーツの山内祥史編、人物書誌大系『太宰治』（昭58）の「著作初出一覧」には掲載されていないし、年譜にもこういう一文があるとは記されていない。もちろん全集にも未収録だ。佚文と騒ぎ立てるほどのものではないが、しかしこういう文があることは著作目録に載せられてもいいし、全集にも入れなければならないだろう。ところでこの日記、本当に太宰治夫人のものだろうか。何か太宰の自己韜晦の文のような気がする。山内祥史氏にでも訊いてみたいところだ。

某月某日

石神井書林より、宅配便。坪野哲久歌集『^{ひびけ}百花』だ。取り出して見ると、箱表には、薄緑色の地に書名「百花」を朱で記した題箋あり、箱全体は和紙装。本体は背局紙で、表紙平は濃い紫の和紙。全体として簡素ななかに稟とした品がある。

この『百花』、書物展望社刊。私が『百花』を求めた理由のひとつは、それにある。齋藤昌三の書物展望社本を、一生かかってもいいから、全て蒐集したいというのは、私の夢だ。しかし書物展望社本、全部で何冊あるのか。一部の装丁の凝った限定本だけは広く知られているが、書物展望社本全体は案外わかっていない。たれか総覧をつくらないものか。昭和の出版文化史から言ってもそれは必要だ。

ところで坪野哲久、アララギ出で、後人民短歌運動を戦後に至るまで押し進めた歌人。しかし人民短歌とは言っても、観念的な左翼詠ではない。内に深く沈潜しつつ、外部世界を強く真率に把握、詠出した歌だ。第一歌集『九月一日』（昭5）は口語詠で、発売即発禁となっている。昭和十四年六月刊の『百花』は定型で、定型歌集としては第一となる。それ故か、価は三万円。しかし内容もそれに見合っている。

人間のくらしはぶさまだ冬をしのぎたかだかと
空にたちはだかる樺

枯草に顔をうづめて兵よ兵よふかい疲れをやす
めてゐるか

後者は当時であっては見事な戦争詠だ。

坪野哲久は昨年十一月九日亡くなった。しかしその最後まで現役の歌人であったことは、福島泰樹主宰の歌誌「月光」2号（昭63・7）の坪野哲久特集を見ればわかる。（おおや ゆきよ）

装幀をめぐる断章

—「近代文学の装幀」展に寄せて—

文学部教授 大屋 幸世

文学作品というのは、ただ読めればよい、というのには確かに一理ある。だからそれを盛る器である書物は、どういう形をしていようが、それは作品の本質に何の関わりもないとは言える。しかしそれでは余りにも貧しくはないか。うまい食物をよい器で食べたい、というのもまたあってよい態度ではないか。そういうのは、〈器〉へのフェッティシズムとして避けるべきなのだろうか。しかしこういうフェッティシズムは人間の心を豊かにこそすれ、貧しくはしないと思う。

書物にもよい衣裳を私は着せてあげたいと思う。書物の内容に応じた衣裳というものがあるはずだ。作品もまたそれを求めているのではないか。

そう、書物は装われることを求めている。なぜなら、作品には排他的なエゴイズムがあるからだ。ほかの作品に対しての自己顕示と言ってもよい。いわば作品は他と区別されることを望み、その差異化として装幀があるのではないか。そこで書物はひとつの〈小宇宙〉となる。

私は私の好きな書物を掌上に載せ、その感触を楽しみ、ためつすがめつその美しさに眺め入る。それは天文少年がはるかな小宇宙を天体望遠鏡でじっと眺めているのと等しい。それを非難する人には、非難させて置くしかない。

さて、歩いて見るのは小園になるが、近代の装幀界をすこしく追通してみよう。

明治に入ってから、意識的に装幀を手がけることになったのはじめての人はだれか。多分長原止水(1864~1930)ということになるのではないか。止水は東京美術学校教授、漫画風の諷刺絵や図案なども得意にしたが、彼の装幀も図案的なものが多い。止水と言えば森鷗外と即結びつくほど、両者の関係は密接だが、有名な『即興詩人』(明35)

の装画も木の枝と葉を図案化した止水のもの。止水の鷗外本の装幀としては、しかし私はこの『即興詩人』よりは小品ながら、『玉匣 両浦嶋』(明35)の波の図案、『長宗我部信親』(明36)のクローバーの図案の方をとりたい。特に前者の、表紙いっばいに大きく曲線を流し込んだ図は、斬新というほかはない。私は無理して両書を額装にし(本自体は痛めない)、見て楽しんでいる。本を額装化するという酔狂なことをしているのは、おそらく私くらいなものか。止水にはほかに伊良子清白『孔雀船』、島崎藤村の『新片町より』『藤村集』などの装幀がある。しかし彼の装幀はほとんど単彩で、地味という感は免れない。

ところで装幀家として、現在でもこの人を抜く人はいないのではないかと思われるのが、橋口五葉(1880~1921)である。そして五葉と言えば夏目漱石ということになる。『吾輩は猫である』を始めとして『三四郎』『それから』とつぎつぎに漱石本を手がけるが、これらのうちのどの書が一番いいかとなると、その人の好みで意見は別れよう。私としては『濛濛集』(明39)、『草合』(明41)をとりたいと思う。前者の、表紙はともかく、ラファエル前派風な扉からはじまる各種の挿絵が、私たちの目を楽しませる。ラファエル前派の好きな私には、貴重な一書だ。『草合』はその淋派風の表紙が私を魅して止まない。これも私の淋派好みの故だ。黒漆や金押を用いたこの『草合』、ぜひ実物を買いたいと念じている。ところでもちろん五葉と言えば、漱石だけではない。その名をさらに著名にしたのが、泉鏡花『三味線堀』(明44)から始まり、吉井勇の『恋愛小品』(大2)で終わる、初山書店の胡蝶本だ。背に胡蝶を配したので、この名があるのは広く知られているように、この叢

書には永井荷風『すみだ川』、谷崎潤一郎『刺青』、森鷗外『青年』といった同時代の問題作、傑作が含まれる。華麗としか言うほかない装幀だが、この胡蝶本どういうわけか古書店などで接する機会は多い。私も何冊か架蔵している。

ところで五葉は「装釘について」(『美術新報』大2・3)で、単行本は「平面的に見る事が無く、表背裏と云ふ様に、三面をたどって見る事になり、それに「見返とか扉とかの連絡」があるから、「立体的に見なくてはならない」、だからその装幀は「写生風の画では不都合だ、装飾の型を取った画か模様でなくてはならぬ」と言っている。これはすべての装幀に当てはまるとは思えないが、五葉の装幀観をよく言い表わしている。

ところで、なぜ五葉のような華麗極まる装幀家が産まれたのだろうか。単に五葉の稟性によるものばかりは言えまい。やはり日露戦争後に勃興したブルジョワ性、それが関与しているのではないか。五葉の出現を許すほどに、近代日本も一定程度爛熟したということだ。

さて漱石本と言えば、津田青楓(1880~1978)も逸せられない。漱石後期の『道草』(大4)や『明暗』(大6)の装幀をしている。漱石に水彩画を青楓は教えていたように、『道草』の表紙は水彩画でさっぱりしており、五葉本とはまったく相違する。青楓は鈴木三重吉本も装幀しているが、一種の軽みがあっていい。『赤蜻蛉』(大3)など文字通り愛す可き可愛らしさがある。

大正にはいると、装幀をする画家が何人も出てくる。まずは私の大好きな小村雪岱(1887~1940)。そして雪岱と言えば泉鏡花となる。その『日本橋』(大3)の装幀の完成度には、何者も口を差しはさむことを許さないものがある。表紙の河岸の風景も見事だが、表裏の見返しは〈遊里〉世界を描いたものは、雪岱以外のなにものでもない。遠近法をもちいて、直線的、鋭角的に家の造作などを描き、小さく芸者を配するところ、〈遊里〉の遊蕩性を抽象的に昇華させた趣きがある。雪岱の絵の持つその種のカタルシス、それが私を引きつける。私は不時の収入があった時、鏡花の雪岱本

『遊里集』(大4。何とふさわしい題か)と『愛染集』(大5)とを購った。後者の表見返し全面に描かれた、雪ふる遊里の外観に遊女らしきを配した木版画は、見る人を蒼然とせしめ、身がひきしまってくる。鏡花の〈遊里〉世界を見事に絵に結晶させたもので、たしかに作品が小宇宙となって現前して来る。

次は竹久夢二(1884~1934)。装幀した本は二百冊を越えるというが、もちろん自らの画集や詩歌集もある。夢二の魅力はその感傷的な頹廢性にあると思えるが、それが長田幹彦や吉井勇らの装幀には向いていたと言えるだろう。近松秋江『舞鶴心中』(大4)、長田幹彦『舞妓姿』(同)、田村俊子『小さん金五郎』(同)と続く叢書『情話新集』を並べてみると、夢二のどろりとした頹唐美がじいんと身に沁み込んでくるようだ。

ところでなぜ夢二はあれほどもてはやされ、現在もお追い求められているのか。いわば多分それは衰退するブルジョワ性とかかわりがある。日本のブルジョワ性は恒常的なものではなく、常に衰退する危機を持っているのではないか。そのような衰退性を孕んだブルジョワジーにとって夢二の感傷的頹廢性は限りない魅力があるのだ。なお五葉、雪岱は東京美術学校出、青楓も仏国留学帰朝者、夢二のみそういう経歴を持たない。

三人目は小穴隆一(1894~1966)。知られているように、芥川龍之介の書物は、多くは彼の装幀になる。芥川は小穴との邂逅を「一生のうちでも特に著しい事件」とし、「この画家の中に誰も知らない詩を発見した」(『或阿呆の一生』)とまで言っている。ところで小穴の装幀はじつに油っぽい。中国風のアクの強さがあると言ってもよい。しかしこれがなぜ、芥川の繊細な神経で張りつめられた作品世界と合うのだろうか。いわばそこにあるのは相反するものによる中和化という魔術であろう。太宰の言葉をもじって言えば、芥川作品には小穴の装幀がよく似合うのだ。そして装幀の側から見れば、装幀に吸い寄せられて作品が変容することがあることも知って置かなくてはならない。それが装幀による作品の新たな〈作品〉化

と言ってよい。だから芥川作品も小穴の装幀本で読むと、微妙に変わってくる。私自身、そういう経験を持つ。

たとえば岸田劉生（1891～1929）の装幀なども、そういう力を持っている。その飄逸な感のする劉生の装幀画は私たちに何かほのぼのとしたある暖かさを与えてくれる。また言うまでもなく白樺同人との交友が深いわけであって、たとえば武者小路実篤の『幸福者』（大8）は劉生の装幀だが、武者は「君の藝術に対する尊敬と、君のこの書にたいする理解に感謝して」という献辞を書いているが、これはまさに『幸福者』が、二人の「尊敬」と「理解」による〈作品〉であることを語っていると言ってよい。装幀とはそういうものでなくてはならない。

昭和に入ると中川一政、佐野繁次郎、棟方志功、青山二郎らと数多い。佐野（1900～）と言えば、横光利一ということになるのだが、この両者の結びつきが私にはもう一つわからぬところがある

（しかし横光本は好きで蒐集しているが）。青山二郎は小林秀雄を中心とする戦前の「文学界」派の装幀家となろうが、しかし彼は装幀家である以上に、ものを見る〈目〉をもった審美家だ。陶器の目ききとして有名だが、その装幀には陶器の肌合い、色合いを持っているように思える。志功（1903～1975）は、戦前すでに日本浪漫派の人たちの本の装幀をしているが、しかし後世に残るのは谷崎潤一郎の『鍵』（昭31）などであろう。それはまさに谷崎の〈生〉と志功の〈生〉とがつくり上げた〈作品〉と言っていいからだ。だから『鍵』は志功本で読まなければ、読んだことにはならぬと私はあえて断言したい。

さて私はいろいろ語って来た。最後に置きたい、装幀を離れた作品は、素裸にされた作家のもののようにだと。素裸の作家などとは、私は付き合いたくない。

（おおや ゆきよ）

展示品リスト

（＊印 大屋幸世氏蔵）

〔青山二郎〕（1901～1979） 美術評論家・装幀家		
1	* 文芸評論 小林秀雄著	白水社 昭和6.7
2	* 続文芸評論 小林秀雄著	白水社 昭和7.11
3	* 続々文芸評論 小林秀雄著	芝書店 昭和9.4
4	中村光夫評論集（二葉亭論） 中村光夫著	芝書店 昭和11.10
5	雙面神 岸田國士著	創元社 昭和11.12
6	蜜蜂 林芙美子著	創元社 昭和14.11
7	女心拾遺 矢田津世子著	筑摩書房 昭和16.1
〔有島生馬〕（1882～1974） 小説家・画家		
8	さくら草 与謝野晶子著	東雲堂書店 大正4.3
9	鸚鵡杯 吉井勇著	太白社 昭和5.4
〔橋口五葉〕（1880～1921） 版画家・装幀家		
10	濠虚集 夏目漱石著	大倉書店・服部書店 明治39.5
11	二人画工 シェンキーウキツ著・内田魯庵訳	金尾文淵堂 明治42.11
12	あきらめ 田村俊子著	金尾文淵堂 明治44.7
13	返らぬ日 鈴木三重吉著	春陽堂 明治45.3
14	烙印 小宮豊隆著	春陽堂 大正2.3
15	十人十話 森鷗外訳	実業之日本社 大正2.5
16	遊行車 泉鏡花著	尚栄堂・芙蓉閣 大正2.6
17	相合傘 泉鏡花著	鳳鳴社 大正3.7
18	舞ごころも 与謝野晶子著	天絃書房 大正5.5
19	毒うつぎ（歌集叢書第1篇） 吉井勇著	南光書院 大正7.5
〔鐔木清方〕（1878～1972） 日本画家		
20	働くをんな 長谷川時雨著	実業之日本社 大正14.7

21	昭和新集	泉鏡花著	改造社	昭和4.4
	[木村莊八] (1893~1958)	画家		
22	怪異草紙	畑耕一著	大阪屋号書店	大正14.7
23	唐人お吉 2冊	十一谷義三郎著	新潮社	昭和5.2・7
24	青年	林房雄著	創元社	昭和17.5
	[岸田劉生] (1891~1929)	画家		
25	人間的生活	武者小路実篤著	叢文閣	大正9.3
26	埋れてゐたもの	武者小路実篤著	聚英閣	大正10.2
27	母と子	武者小路実篤著	改造社	昭和2.10
28	十年	佐藤春夫等編	改造社	昭和4.9
	[小寺健吉] (1887~1977)	洋画家		
29	紅あざみ	尾島(小寺)菊子著	日比谷書院	大正3.3
	[小出楯重] (1887~1931)	画家		
30	蓼喰ふ蟲	谷崎潤一郎著	改造社	昭和4.11
	[小村雪岱] (1887~1940)	日本画家		
31	下町情話	久保田万太郎著	千章館	大正4.9
32	*遊里集	泉鏡花著	春陽堂	大正4.10
33	*愛染集	泉鏡花著	千章館	大正5.10
34	弥生帖	泉鏡花著	平和出版社	大正6.4
35	近代情痴集	谷崎潤一郎著	新潮社	大正8.9
36	愛府	泉鏡花著	新潮社	大正13.11
37	番町夜講	泉鏡花著	改造社	大正13.12
38	寂しければ	久保田万太郎著	春陽堂	大正15.11
39	果樹	水上瀧太郎著	改造社	昭和4.5
40	斧琴菊	泉鏡花著	昭和書房	昭和9.3
	[河野通勢] (1895~1950)	画家		
41	明君行状記	真山青果著	南宋書院	昭和2.4
42	恥以上	倉田百三著	改造社	昭和5.5
	[小杉未醒(放庵)] (1881~1964)	画家・歌人		
43	戯場壁談議	畑耕一著	奎運社	大正13.9
	[鍋井克之] (1888~1969)	洋画家・随筆家		
44	枯木のある風景	宇野浩二著	白水社	昭和9.3
45	思い川	宇野浩二著	中央公論社	昭和26.1
	[棟方志功] (1903~1975)	版画家		
46	後鳥羽院 増補新版	保田與重郎著	萬里閣	昭和17.5
47	鍵	谷崎潤一郎著	中央公論社	昭和31.12
48	夢の浮橋	谷崎潤一郎著	中央公論社	昭和35.2
	[長原止水] (1864~1930)	洋画家		
49	即興詩人 2冊	H.C.アンデルセン作・森鷗外訳	春陽堂	明治35.9
50	*玉匣両浦嶋	森鷗外著	国光社	明治35.12
51	*長宗我部信親	森鷗外著	国光社	明治36.9
	[中川一政] (1893~)	洋画家・詩人・随筆家		
52	牡蠣	林芙美子著	改造社	昭和10.9
53	われは海の子	田中英光著	桜井書店	昭和16.5
54	雪蘆抄	水原秋桜子著	石原求龍堂	昭和17.7
	[中沢弘光] (1874~1964)	画家		
55	残紅	小栗風葉著	千代田書房・杉本梁江堂	明治42.7
56	故郷	ブーダーマン作・島村抱月訳補	金尾文淵堂	明治45.6
57	舞扇	長田幹彦著	春陽堂	大正5.5
58	火の鳥	与謝野晶子著	金尾文淵堂	大正8.8
59	采花集	与謝野鉄幹著	金尾文淵堂	昭和16.5

[小穴隆一] (1894~1966) 洋画家				
60	沙羅の花	芥川龍之介著	改造社	大正11.8
61	支那遊記	芥川龍之介著	改造社	大正14.11
62	湖南の扇	芥川龍之介著	文芸春秋社	昭和2.6
63	侏儒の言葉	芥川龍之介著	文芸春秋社	昭和2.12
64	安城家の兄弟	里見弴著	中央公論社	昭和6.3
65	江戸城明渡し	藤森成吉著	改造社	昭和13.2
66	虎彦龍彦	坪田譲治著	新潮社	昭和17.4
[恩地孝四郎] (1891~1955) 版画家・装幀家				
67	白秋詩集 2冊	北原白秋著	アルス	大正9.9~10.1
68	秋の朝	吉田絃二郎著	改造社	大正10.9
69	まざあ・ぐうす (白秋童謡集3)	北原白秋訳	アルス	大正10.12
[佐野繁次郎] (1900~) 洋画家				
70	地獄の季節	アルチュール・ランボオ作・小林秀雄訳	白水社	昭和5.10
71	機械	横光利一著	白水社	昭和6.4
72	紋章	横光利一著	改造社	昭和9.9
[杉浦非水] (1876~1965) 商業美術家				
73	生さぬなか 4冊	柳川春葉著	金尾文淵堂	大正2.2~5
74	初一念	小栗風葉著	隆文館	大正3.6
[竹久夢二] (1884~1934) 画家・詩人				
75	踏絵 (心の華叢書)	柳原白蓮著	竹柏会	大正4.3
76	祇音歌集	吉井勇著	新潮社	大正4.11
77	名婦伝	長谷川時雨著	実業之日本社	大正8.5
78	人の罪 2冊	小栗風葉著	新潮社	大正8.2~9.2
79	金色夜叉終篇	長田幹彦著	春陽堂	大正9.7
[東郷青児] (1897~1978) 画家				
80	牝鶏の視野	深尾須磨子著	改造社	昭和5.5
81	罌粟はなぜ紅い	宇野千代著	中央公論社	昭和5.11
[津田青楓] (1880~1978) 画家・随筆家				
82	* 桑の實	鈴木三重吉著	春陽堂	大正3.1
83	* 赤蜻蛉	鈴木三重吉著	岡村盛花堂	大正3.3
84	金剛草 (大正名著文庫22篇)	夏目漱石著	至誠堂	大正4.11
85	朱葉集	与謝野晶子著	金尾文淵堂	大正5.1
86	牡丹のある家	佐多稲子著	中央公論社	昭和9.8
[山村耕花] (1886~1942) 日本画家・版画家				
87	お艶殺し	谷崎潤一郎著	千章館	大正4.6

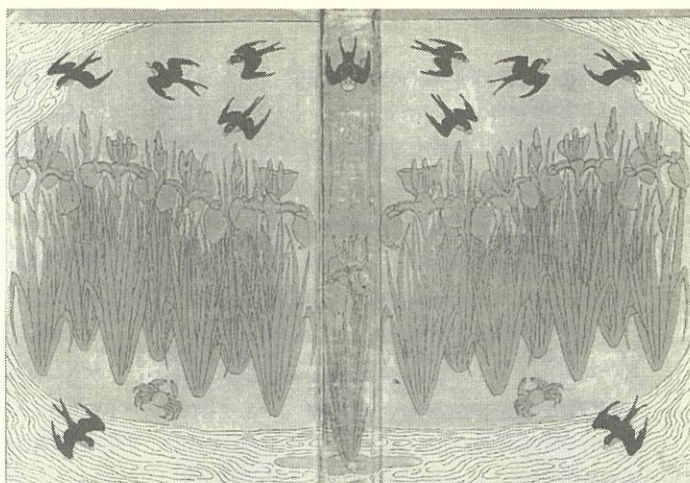
「近代文学の装幀」展

期日 5月15日(月)~6月3日(土)

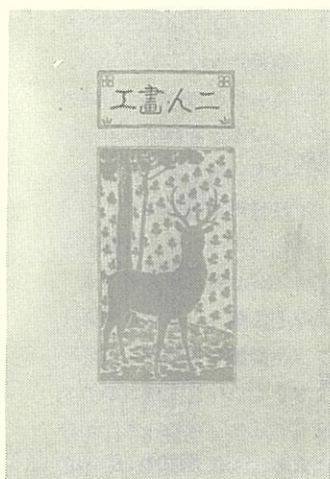
会場 図書館1F展示コーナー



青山二郎 4 中村光夫評論集(二葉亭論)



橋口五葉 16 遊行車



橋口五葉 11 二人画工



橋口五葉 17 相合傘



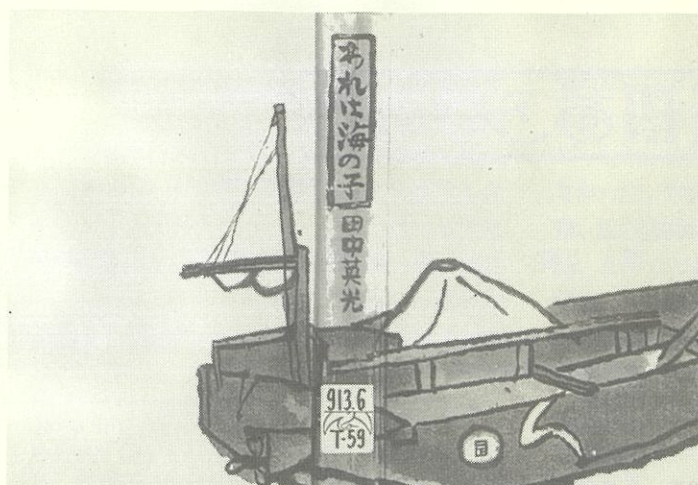
小村雪岱 35 近代情痴集



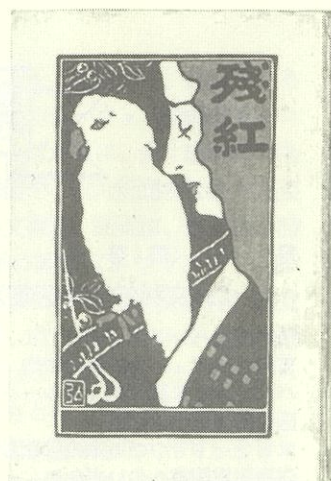
長原止水 50 玉匣兩浦嶋



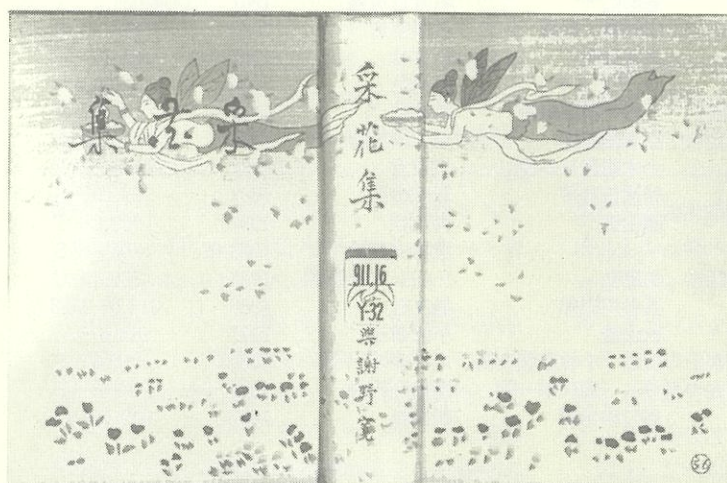
長原止水 51 長宗我部信親



中川一政 53 われは海の子



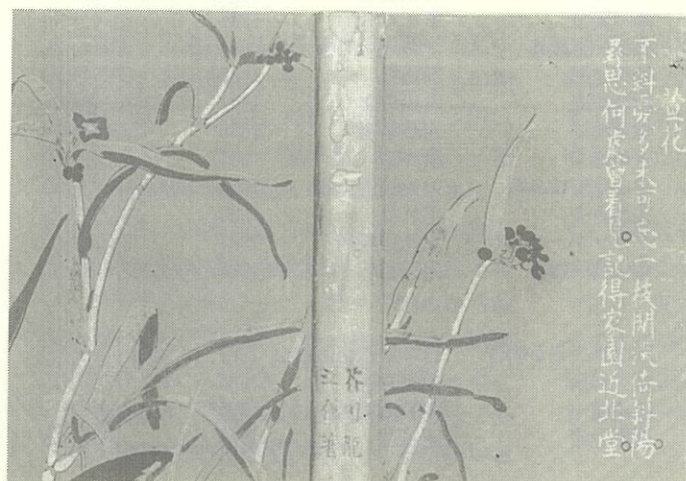
中沢弘光 55 残紅



中沢弘光 59 采花集



竹久夢二 76 祇音歌集



小穴隆一 63 侏儒の言葉



津田青楓 83 赤蜻蛉

新刊あらかると

書 名 (叢 書 名) 著 者 出 版 社 出版年 請求記号

《人文科学関係図書》

情報調査ハンドブック	谷口早吉・高山正也	雄山閣	1988	⑩002.7036-J
百科コンピュータの基礎知識	土居範久・寛捷彦編	岩波書店	1987	007.64-C
パソコンC言語入門 (ブルーバックス)	脇英世	講談社	1988	007.64-W
図書館屋の小さな窓	久保和雄	青弓社	1988	010.4-K
エピソードでつづる本のはなし	庄司浅水	三修社	1987	020-S
江戸児童図書へのいざない	アン・ヘリング	くもん出版	1988	020.21-H
平凡社における失敗の研究	大原緑峯	ばる出版	1987	023.1-H
舶来事物起原事典	富田仁	名著普及会	1987	⑩031.4-T
死を考える	中村真一郎編	筑摩書房	1988	114.2-S
インド神話入門	長谷川明	新潮社	1987	162.25-H
大発見 未知に挑んだ人間の歴史	D.ブラスティン	集英社	1988	209-B
海のシルク・ロード事典 (新潮選書)	三杉・榎原編著	新潮社	1988	209-M
21世紀を展望する日本淑女録	原孝次郎編	東京興信所	1987	⑩281.03-N
江戸東京学事典	小木新造ほか編	三省堂	1987	⑩291.3603-E
大江戸観光	杉浦日向子	筑摩書房	1987	702.15-S
メデューサの知 アリス狩り	高山宏	青土社	1987	702.3-T
世界美術の旅 全12巻		世界文化社	1988-89	706.9-S
魅せられし空間 広場と劇場の神話学	海野弘	PARCO出版局	1987	770.4-U
山猫の遺言	長谷川四郎	晶文社	1988	913.6-H23
恋愛の発見 現代文学の原像	秋山駿	小沢書店	1987	914.6-A7
『青鞥』セレクション 「新しい女」の誕生 小林登美枝編		人文書院	1987	918.6-S
クラーベルト滑稽譚 (ドイツ民衆本の世界) 藤代幸一訳		国書刊行会	1987	948-D
現代北欧文学18人集	谷口幸男編	新潮社	1987	949.43-G

《社会科学関係図書》

新聞のヘソ	日比野和幸	晶文社	1987	304-H
象徴天皇 (岩波新書)	高橋紘	岩波書店	1987	313.6-T
Q & A 国際化マニュアル	高木繁伎	ぎょうせい	1987	319.1-T
講座 人間関係の心理 全6巻	島田一男監修	プレーン出版	1986-88	361.4-K
集団の科学 (ブルーバックス)	松田達郎	講談社	1988	361.4-M
日本三都論 東京・大阪・京都	梅棹忠夫	角川書店	1987	361.48-U
青鞥の時代 (岩波新書)	堀場清子	岩波書店	1988	367.21-H
華の乱	永畑道子	新評論	1987	367.21-N
現代子ども大百科	平山宗宏ほか編	中央法規出版	1988	⑩371.4503-G
ノートや鉛筆が学校を変えた	佐藤秀夫	平凡社	1988	372.1-S
衣服の記号論	アリソン・リュリー	文化出版局	1987	383.1-L
中国食文化事典	中山時子編著	角川書店	1988	⑩383.803-C

《自然科学関係図書》

遙かなる揚子江源流	松本徑夫ほか編著	日本放送出版協会	1987	402.9229-H
科学英語論文を書く前に	桜井邦朋	朝倉書店	1988	407-S
和算家の旅日記	佐藤健一	時事通信社	1988	419.1-S
砂糖はなぜ甘い? (ブルーバックス)	西尾元宏	講談社	1988	437-N

書 名 (叢 書 名)	著 者	出 版 社	出版年	請求記号
地図を作った人びと	J.N.ウィルフォード	河出書房新社	1988	448.9-W
ダーウィンをめぐる人びと (朝日選書)	松永俊男	朝日新聞社	1987	467.5-M
世界動物発見史	ヘルベルト・ヴェント	平凡社	1988	480.4-W
動物は夢をみるか?	ジョイス・ポーブ	東京書籍	1988	481-P
動物の変わりものたち	ロベール・ウルフ	八坂書房	1988	482-R
ブッダの医学	杉田暉道	平河出版社	1987	490.16-S
江戸のオランダ医	石田純郎	三省堂	1988	490.21-I
心と脳のしくみ (講談社学術文庫)	時実利彦	講談社	1988	491.371-T
女性とエイズ	D.リチャードソン	新水社	1987	491.8-R
サインを見逃すな NHK教養番組センター医学チーム編		日本放送出版協会	1987	498-S
ストレスと自己コントロール (講談社学術文庫) 平井富雄		講談社	1988	498.39-H
知的所有権 経済企画庁総合計画局編 大蔵省印刷局			1987	507.2-C
イスラムの建築文化	アンリ・スチールラン	原書房	1987	522.6-S
荒野の開拓者 (建築巡礼1)	香山壽夫	丸善	1988	523.53-K
宇宙環境の利用 無重力でものをつくる	栗木恭一	丸善	1988	538.9-K
東京湾超発電計画 (ブルーバックス)	天外伺朗	講談社	1988	543.6-T
分離の科学 (ブルーバックス)	上野景平	講談社	1988	571.4-U
超精密材料ニューガラスの世界	境野照雄	講談社	1988	573.56-S
もっとステキに色を着る事典	高橋ユミ・波川育由	河出書房新社	1988	593.36-T
ネコと魚の出会い 「食」から探る人間と文明の未来 西丸震哉 角川書店			1987	596-N
小鉢の心意気 わたしの料理修業	阿部なを	筑摩書房	1988	596.04-A
イタリア料理大全	J.ブジャッリ	新潮社	1987	596.13-B
毛利子来の子育てストーリー	毛利子来	筑摩書房	1988	599-M
日本の宿 (旅の民俗と歴史1)	宮本常一編著	八坂書房	1987	688.8-H

《視聴覚資料》

◇録画資料 レーザーディスク

題 名	発売年	時 間
永平寺 道曲:海童道道祖老師 NHK編集	1986	45分
圓生古典落語選集 其ノ一 鯉沢 (1970年収録)・蛙茶番 (1975収録)	1982	90分
圓生古典落語選集 其ノ二 ねずみ穴 (1972年収録)・小言幸兵衛 (1977年収録)	1982	90分
圓生古典落語選集 其ノ三 文違ひ (1973年収録)・寝床 (1977年収録)	1982	90分
圓生古典落語選集 其ノ四 掛取万歳 (1973年収録)・庖丁 (1973年収録)	1982	90分
圓生古典落語選集 其ノ五 百年目 (1973年収録)・なめる (1974年収録)	1982	90分
圓生古典落語選集 其ノ六 一人酒盛 (1975年収録)・大山詣り (1975年収録)	1982	90分
圓生古典落語選集 其ノ七 栗橋宿 (1977年収録)・墓の油 (1979年収録)	1982	90分
圓生古典落語選集 其ノ八 三年目 (1975年収録)・唐茄子屋政談 (1972年収録)	1982	90分
圓生古典落語選集 其ノ九 淀五郎 (1976年収録)・三十石 (1977年収録)	1982	90分
圓生古典落語選集 其ノ十 ミイラ取り (1971年収録)・文七元結 (1975年収録)	1982	90分
圓生古典落語選集 其ノ十一 浮世風呂 (1976年収録)・引越の夢 (1970年収録)	1982	90分
圓生古典落語選集 其ノ十二 御神酒徳利 (1976年収録)・お祭佐七 (1977年収録)	1982	90分
*宇野信夫監修 東京放送製作/著作 国立劇場にて収録		
大黄河 全10集 全5巻 *NHK編集	1986-87	100分
地球大紀行 全12集 全6巻 *NHK編集	1987	98-110分
鳥たちの世界 上・下 *NHK日本鳥類保護連盟監修	1984	104-113分
美の美シリーズ1 アンゲル/ドラクロワ	1986	57分
美の美シリーズ2 セザンヌ/コロ/ミレー/クールベ	1987	58分
美の美シリーズ3 マネ/モネ	1987	56分
美の美シリーズ4 ゴッホ	1987	51分
美の美シリーズ5 ロダン/ロートレック	1987	54分
*日経映像制作/著作		

図書館だより

◎開館日のお知らせ（5～7月）

○=閉館日

□=開館時間短縮日

月～金曜日 9:00～16:30 土曜日 9:00～12:30

5

日	月	火	水	木	金	土
	①	②	③	④	⑤	⑥
⑦	8	9	10	11	12	13
⑭	15	16	17	18	19	20
⑳	22	23	24	25	26	27
㉘	29	30	㉚			

6

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
④	5	6	7	8	9	10
⑪	12	13	14	15	16	17
⑱	19	20	21	22	23	24
㉕	26	27	28	29	㉗	

7

日	月	火	水	木	金	土
						1
②	3	4	5	6	7	8
⑨	10	11	12	13	14	15
⑱	17	18	19	20	21	22
㉒	㉓	㉔	25	26	27	㉖ ㉗

◎視聴覚サービスのお知らせ

視聴覚室は4月10日（月）より7月17日（月）まで平常開室いたします。

開室日 月曜～金曜日 12:30～18:30

◇映写会の日程◇ 会場：A Vホール

4月 新入生を迎えて オードリー特集

12日（水）2:50～4:50 ローマの休日（118分）

21日（金）1:00～2:55 ティファニーで朝食を（114分）

26日（水）2:50～5:45 マイ・フェア・レディ（172分）

5月 自然と冒険

10日（水）2:50～4:45 風の谷のナウシカ（116分）

19日（金）4:30～6:30 インディ・ジョーンズ（118分）

24日（水）1:00～3:25 南極物語（145分）

6月 雨

2日（金）4:30～6:05 シェルブールの雨傘（91分）

7日（水）2:50～4:40 哀愁（108分）

16日（金）1:00～2:45 雨に唄えば（103分）

23日（金）1:00～3:05 若草物語（122分）

28日（水）4:30～5:50 東海道四谷怪談（76分）

◎平成元年度展示のお知らせ

「近代文学の装幀」展

5月15日（月）～6月3日（土）

先号で予告してありましたが、展示会の名称を内容に即し標記のように変更いたしました。数量的にはかなりのものになり、期間中には一部の展示変えを行います。ご期待ください。

◎平成元年度編集委員（39～42号）

海野雅央 蓮見昭子 府川修次

池田聡子 松森久美子

◎編集後記

新年度を迎え編集委員も一新されました。これを機会にこのアゴラもイメージチェンジをはかり、より読みやすいものにとほりきっています。ご支援ください。

アゴラ —— 鶴見大学図書館報 —— 第39号 1989年4月30日発行

編集・発行 鶴見大学図書館 館長 丸山昭二郎

〒230 横浜市鶴見区鶴見2-1-3 ☎045-581-1001

印刷／榊野毛印刷（045）252-2511